



本がつくる磁場－惹きつけるキュレーション

幅 允孝(有限会社BACH代表取締役、ブックディレクター)

報告者：今村信隆(北海道大学文学研究院)

今回のイベントでは、ブックディレクターとして全国各地で活躍する幅允孝氏をお迎えして、その具体的な活動からみえてくるキュレーションの極意を学びました。

「キュレーション」という言葉は、少なくともミュージアムの世界では、極めて一般的な用語です。たとえば、学芸員の名刺の裏には英語で"Curator"と職名が記されていることが少なくありません。また、とりわけ美術・芸術の世界では、展覧会を組み立てる営みをキュレーションと呼ぶ向きもあります。けれどもこうした、自分たちの世界では「日常的」「一般的」であり、かつ、その外部ではあまり用いられない「専門的」な用語ほど、わざわざ立ち止まって改めて再考する

機会が乏しいのも事実です。その意味で、紙の本を中心に据え、図書館などのキュレーションを手がける幅氏の専門性は、ミュージアムにおけるキュレーションを再考するための対話の相手として、このうえなく刺激的なものでした。

幅氏のキャリアの出発点は書店員だったといいます。ただ、それは折しも、書籍の販売数が次第に低迷していく時期にあたっていました。その様子を目の当たりにしながら幅氏は、本というものはそもそも、著者以外の誰かが手にとり、開いてみたときにはじめて「本」たりうるのではないか、という想いを抱いたそうです。そこで、人がやって来ないのであれば、まずは人がいる場所に本を持っていき、本を差し出すことが必要だという理念に衝き動かされ、ブックディレクターという仕事を手探りで創り出していきます。

ミュージアム関係者であるわたしたちにとっても示唆に富むと思われるのは、このときに幅氏が、まずは自分が差し出そうとするものの分析から出発するべきだと提言していることです。幅氏の場合、差し出そうとするものは紙の本ですから、今の世の中において、紙の本はどのような位置に置かれているかを考えていくことになります。現代は、幅氏によれば、時間の奪い合いが激しくなっている時代です。のみならず、こちらが受動的に待っていたとしても、種々のエンターテイン

メントや情報が勝手にやって来てくれる時代です。幅氏の表現を借りれば、「エンターテインメントが自分の余白に注ぎこまれ」、気がつけば本を読んでいないということが起こりがちな時代だと言えるでしょう。また、自分から積極的に「検索」する場合にも問題はあります。検索型の世の中では、すでに知っているものには出会えても、まったく知らないものを偶然手に取る機会は限定されているからです。

しかし、そのような時代だからこそ、なおさら、紙の本の力が必要だと幅氏は説いていきます。もちろん幅氏は、デジタルのコンテンツを否定するわけではありません。しかし、紙の本を含めた多様なメディアを行き来する経験が重要であると主張するのです。

紙の本は、一度刊行されてしまえば、容易に書き直したり、内容を消し去ったりすることはできません。そのため、本の刊行に際しては推敲が重ねられます。言いつぱなしではなく、責任の所在がはっきりしたメディアだ、と見えそうです。

また、受け手に受動性を求めるメディアが多い現代社会ですが、そのなかにあって紙の本は、自分で読み進めていくことを読者に求めます。手間がかかって、面倒です。しかし、コンテンツに接している時間を自発的にコントロールし、自主的に何かを掴みにいく経験こそが、結局はAIの時代にも流されない確固たる個性を育てるのではないか。そのように幅氏は説いていくわけです。

では、このように時代にあって、人に本を差し出すためにはどうすればよいのか。レクチャーの後半は、そのための工夫の一端を、豊富な事例とともに具体的に教えてくれるものでした。

大阪の中之島にはじまり、全国に展開しつつある「こども本の森」のプロジェクトでは、選書と配架を中心に、子どもたちが本と出会う環境づくりを幅氏がプロデュースしています。



選書には、必ず、選んだ人の自我やフィルターが介入します。しかし、幅氏は、そのことの責任を引き受けつつ、同時に地域の関係者への丁寧なインタビューワークも行って、本を選ぶのだといいます。配架も重要です。一般的な十進分類法ではなく、子どもたちの知識や経験を結節点としながら、すでに知っていることの外側へと世界をひろげていきます。

館の入口付近には、「外」の世界ともつながりやすい、自然や動物に関する本を。館の奥には、じっくりと向き合いたい、将来に関する本や生死を扱った本を。階段下、子どもたちがもぐり込めるスペースには洞窟にまつわる本を。こうして、時には遊び心も織り交ぜながら、空間性や身体性をフルに活用して書棚をつくっていく作業は、まさにミュージアムのキュレーションにも似ています。

考えてみれば、ミュージアムもまた、モノと情報を両輪として進んでいく場所です。そこでの仕事は、単にモノや情報を設置するだけで十分ということはないはずです。モノや情報を選び、組み合わせ、新しい意味や価値を提案すること。そして、そうしたモノや情報と出会うための、「出会いかた」そのものをつくること。その重要性を再考することができたレクチャーでした。

フェイクが横行し、真実がすると滑って逃げていくような時代のなかで、紙の本やミュージアムの資料がもつ手応えが、もう一度みなおされるべきなのかもしれません。

